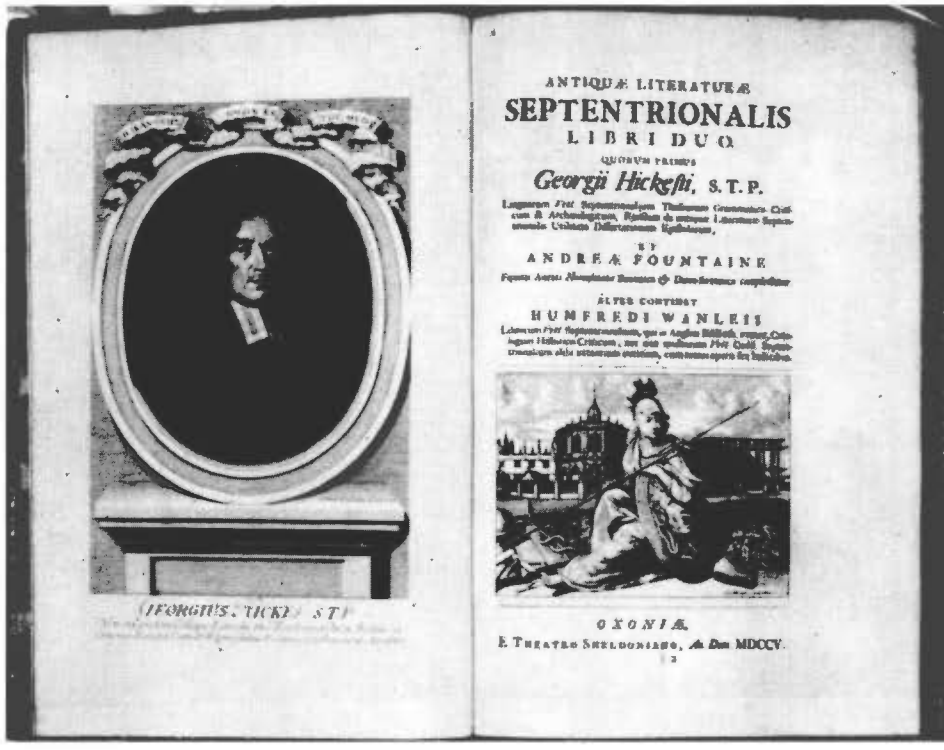
八角塔

1969. 6

5

慶應義塾図書館



ANTIQUÆ LITERATURÆ
SEPTENTRIONALIS
LIBRI DUO
QUORUM PRIMUS
Georgii Hickesii, S. T. P.
ET
ANDREÆ FOUNTAINE
ALTER CONTINET
HUMFREDI WANLEIJ
OXONIÆ,
E THEATRO SHELDONIANO, *Anno Dni* MDCCV.

Hickes, George. Linguarum vett. Septentrionalium thesaurus grammatico-criticus et archæologicus. Oxoniæ. 1703—1705. (142X-1-3)

ジョージ・ヒックス監修

「古代北欧諸言語の文法的・批評的，考古学的集成」オクスフォード大学出版局，1703—1705年刊。三巻。

ジョージ・ヒックス（George Hickes, 1642—1715）は，この書の第一巻と第三巻とに，古代英語（アングロ・サクソン語）とゴート語と古代アイスランド語の文法を書き，そのほかにアングロ・サクソンの古銭学に関する論文も載せている。すべて記述はラテン語である。この書の第二巻は，最も有名な部分で，これは，ハンフリー・ウォンリー（Humphrey Wanley; 1672—1726）が英国各地の図書館や書庫にあった古代英語の写本を探索し調査して，その内容をラテン語で記述した「目録」（Catalogus）である。古代英詩の現存する四大写本のうち，イタリアのヴェルチェルクにある一冊を除いた他の三冊は，すべてこのウォンリーの「目録」に記載されている（「キャドモン写本」〔Junius X1〕は77ページ，「ベーオウルフ写本」〔Cotton. Vitellius A. XV〕は218—19ページ，「エクセタ写本」〔Codex Exoniensis〕は279—81ページ）。18世紀およびそれ以後，今日に至るまで，アングロ・サクソンの言語や文学の研究にこの書の果した役割の偉大なことは，量りしれぬほどであり，今日 N. R. Ker の *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* (Oxford, 1957) が出版された後も，なおウォンリーの *Catalogus* はその有用性を失っていない。その理由は，ウォンリーが写してこの書物に収録した文献の，もとの写本がその後になって亡失したものがあり，これらの文献のテクストについては，ウォンリーの転写しておいたものが唯一の典拠になるからである。

（文学部教授・厨　川　文　夫）

図書館の新幹線

佐　藤　　朔
（塾　長）*

ようやく慶応義塾研究・教育情報センターも軌道にのり，本年4月から本格的な準備活動に入り，6人の専従者をおいた準備本部で10月実施を目標として，綿密なプラン作りをしている。

私は図書館長として，センター構想を実現し，研究者にたいして，徹底的な情報を提供して，大いに研究の便を計ることを長年の夢として抱いてきた。これがプラン通り運営されてゆけば，あらゆる分野の研究が厳密，迅速に進められ，多くの学問的な新しい発見，進歩がなされることであろう。これまで人文科学，社会科学においては，このようなサービスを行なう大学図書館は前例がなかっただけにその効果の程は予想もつかないが，学問研究の方法において革新的な役割を果すことは確実であろう。一つの主題の研究についてはこれまでにくらべて，綿密な調査，分析を行なうことが可能になり，従って研究者にとって他の主題や異った分野の研究などを取り入れて，新しい学問の領域を拓り開いて行くことも出来るであろうと思う。

研究・教育情報センターは，従来の図書館，研究室，研究所における新旧さまざまな厖大な資料を情報源としているが，近い将来においてコンピューターを導入し，さらにはテレックスなど情報伝達用の装置を整え，わが国における諸大学図書館，国会図書館，さらには諸外国の研究機関との学術的資料，情報の交換が実現されるであろう。マイクロフィルム，マイクロフィッシュ，テープ，スライドなどの資料源も十分に備え，文献調査資料を充実させ，一方古文書，古典など特殊資料については，その特殊性を尊重して処理したいと考えている。従ってセンターを理想的に運営して行くためには高度の専門教育を受けたライブラリアンを多く導入して各種資料の利用に関して濃密なサービスが行なえるように計りたいなど，まだまだなすべきことは無限にある。比喩的にいえば，旧図書館は東海道本線のようなもので，その特長を活かしながらセンターのサービスと融合させてゆく。一方，現在計画されているサービスは新幹線のようなものであり，同じ駅から出発しても特別のダイヤを組み，車輛編成をして，高速力で走ることを考案しなくてはならない。情報センターは，上記の二つのサービスを一つにまとめたものと考えられる。現在準備本部では，そのための編成を急いでいるところであるが，本線と幹線を巧みに組み合せることは，初めての試みのことであり，至難の業である。しかしそれもほぼ完了し，新研究棟の完成と同時に発足できるめどがついたところである。

これまでの多くの教職員の理解と熱意と努力のお蔭で，この壮大な計画が実現される運びになったことを深く感謝する。　（1969年6月）

* 前図書館長兼慶応義塾・研究教育情報センター準備本部長

八角塔　第5号　目次

《巻頭言》　図書館の新幹線……佐　藤　　朔…… 1
特集　―情報化社会と研究・教育機関―……石川　忠雄・高山　隆三・松本　三郎…… 2
鈴木　一江・奥泉栄三郎
研究・教育情報センターの機能と業務……藤　山　正　信…… 5
慶応義塾研究・教育情報センター計画（抄）…… 9
三田研究・教育情報センター計画（抄）……11
Management atlitudes ; team relalionships（抄訳）……14
図書館ニュース……15
情報センター設立準備業務の現況……16
最近の大学問題に関する雑誌記事の紹介……17

情報化社会と研究・教育機関

—慶応義塾研究教育情報センター構想について—

石　川　忠　雄
（法学部教授・前常任理事）

こんにち，学問研究の分野で我々が接する情報資料の量が想像できない程，厖大なものであることは衆知のとおりである。また，第２次世界大戦後の多くの社会科学及び自然科学の分野で学問研究の方法に非常に大きな変化が現われてきていることも否定しえない事実である。

大学が学問研究の場としての性格をもち続けようとする限り，この２つの大きな変化に対応していくことはどうしても必要であろう。大学のいま１つの任務である教育についても，それがすぐれた研究の成果によってささえられなければならないことは当然でもあり，そのことからもこの必要はさらに大きなものになるといわざるをえないのである。

このような大学の対応は２つの方向から行なわれなければならないであろう。その１つは，いうまでもなく，狭義の意味での研究体制の変革であり，いま１つは必要な整理された情報資料を適切に研究者に提供し得る体制を作りあげることであろう。

この点から考えると，慶応義塾の研究資料の収集，整理，提供の体制は，すでにこのような時代的要請に適応するにはきわめて不充分なものになっていたといわなければならない。例えば塾内には，研究室，図書館，研究所などが各地に存在し，その間に有機的な，真に統合的な機能は営まれていないということ，従って，それぞれの機関が所有する研究資料についても，なにがどこに存在するかが必ずしも研究者にとってあきらかではないことなどもその例であろう。まして研究者の研究課題について適確な情報を提供する機能はほとんど，いとなまれていないといっても過言ではないのである。その意味において，慶応義塾がその学問研究を発展させることを望むかぎり，このような体制が変革されなければならないことは明らかである。非常な速度で変化する現代の世界において，現状維持ということはありえない。現状を続けるということは，後退につながるといわなければならないのである。研究・教育情報センターの構想は，このような認識と必要から生まれたものであり，慶応義塾大学が学問研究と教育をその任務とし続けるかぎり，現在の時点においてどうしてもとりあげなければならない緊急の課題であったのである。

もちろんこのような，組織の誕生は，慶応義塾のなかで組織的にも機能的にも，いろいろな問題を作り出すかもしれない。古い体制との矛盾も生まれるであろうし，この問題に関する在来の認識とも摩擦を引き起こすかもしれない。かりにそういった困難はあるにしても，研究・教育情報センターの組織は，どうしてもつくらなければならないものであったのである。

本年４月１日から，ようやくこのセンターの準備事務が開始された。各教職員，理事会，評議委員会などの了承をえて，センター設立への第１歩が踏み出された。おそきに失した感がないわけではないけれども，まことに喜ぶべきことと思っている。塾内すべての人々の努力によってすぐれたものに育てあげたいものである

高　山　隆　三
（経済学部助教授）

現在，情報センターの速な発足は，夥しい図書，資料類が出版され，かつその量が今後一層増大することが見通される限り必須というべきであろう。大学が大学である為の最高の学問研究水準を絶えず確保・維持するには，その一基礎条件たる図書・諸資

料の速かな確実な入手と整理，すなわち利用者が必要に応じて，当該分野の研究上の図書・諸資料の検索，閲覧の態勢が整備されなければならない。とすれば，その場合，研究者よりの研究・教育情報センターへの第1の要望としては，従来，研究者の研究上の一部を構成し，かつ多くの時間をさいていた図書・資料・論文の検索を合理化し，かつその過程を分担されることである。

無論，情報センターの一課題も「計画」にも明らかなように，そこに据えられており，かかる態勢を創り出し，運営し，充実するには「レファレンス・ライブラリアンおよびそれを補佐するスタッフ」がいかに養成確保され，「専門職制度」が確立されることが，当面の最大の問題として指摘されており，まさに，その問題こそ情報センターの死命を制するものといっても過言ではなかろう。しかしかかる専門家をいかに養成・確保するかについては今後の問題にせよ，その計画は明らかにされていないようである。専門分野が細分化される一方，隣接分野との接触が深められるという研究方向の下で，研究上の厖大な文献を的確・迅速に把握・入手し，それをサービスするには，その分野の研究に就いてまさに深い専門的知識をもつ者が中心とならなければならない。その為には，すくなくとも，各専門分野（さしあたって各学部）で数名の大学院修了者が，教員と同一資格をもって，書誌学の専門家としてその任に当ってゆく制度が必要となるように思われるのである。

その他，三田の各学部の実情の下で情報センターへいかに統合をすすめてゆくか等，今後の問題とされなければならない点が多々あるとはいえ統合は各学部の図書・資料類の利用・サービスの態勢を確立することを基礎として積み上げてゆかなければならないであろう

松　本　三　郎
（法学部助教授）

佐藤朔先生が，ミシガン大学150年祭の式典に参加されたかえりにボストンに立寄られた際，文学部の大江教授と私の2人が御迎えにうかがったのはもう2年も前のことである。大江教授の御宅で，ビールと夫人のおいしい料理を飲食しながら，期せずして3人がひとしく羨ましく思ったのは，アメリカ各大学の図書館制度の優れていることであった。

日本に帰ってみると，その佐藤図書館長の下で塾においてもすでに，研究教育計画委員会が設置（1965・10）活動を続けており，やがて研究・教育情報センター構想の発表（1968・5），三田特別委員会の発足（1968・6）と相次ぐ改革への道が進展していた。それは正に，塾内の研究室，研究所を含むすべての図書館体制の一元化を目的としたもので，アメリカの中央図書館体制に接近するための一大改革案であった。

もちろん，キャンパスと学部が地理的に分散している現在の塾の場合，利用部門における統合は望ましくもないし，また不可能である。研究・教育情報センターが整理部門における集中，利用部門における部門化という基本方針を採用したのは当然であった。しかし，この整理部門における集中的業務の処理と，一元化される情報サービスが，いかに研究学習活動の経済的効率を高めるかは余りにも明らかである。非常に地道にではあるが，われわれ研究者の，また学生のもっとも望み求めている「早く，正確に，安く」情報と資料を入手するための方法と機構が，恐らく日本では最初の試みとして今塾において開発されつつあることは，塾に生きる1人として誇りであり喜びでもある。

しかし，この新らしい素晴らしい構想を，いかに生かし育てていくかは，すなわちそれを単なる絵に書いた餅ではなく，食べれる餅にするのは，われわれ1人1人の役目であるということも確かであろう。

鈴　木　一　江
（研究室経商資料室係員）

もしも，現在の慶應の三田研究室の現状について考えることがあったとすれば，今回の情報センター構想は，当然，出てきた筈だと受けとることでしょう。図書館の近代的サービスを期待する利用者の立場からみれば，ここではそれは程遠いものであるからです。利用者側からのみならず，中で働く側からみても，もう少しなんとかならないものかと思われ

る点が少なくありませんでした。予算・人員・仕事の配分等，長い間調整もされず，何とか繋ぎ合わせて今まで保ってきたというのが本当で，それも限界にきたというところでしょう。それは例えば図書・資料の値上りに予算の増額が追いつけなくなるとか，当然買っておきたいのが買えなくて，他大学にお願いして時間と費用をかけて利用させて戴くとかいう訳です。勿論，それで全ての問題が解決する訳でもなく，すぐに良くなるというものではないでしょうが，期待するという点では，非常に大きなものがあると思われます。しかしながら，さて具体的に，となると，何となく複雑なもやもやしたものが頭の中を横切っていきます。勿論個々の問題はこれから詳しく決めていく訳でしょうが，現在の時点でできること，決められることを，すぐに片端から実行していくのではないでしょうから，研究室で遅れている方面，採用していないことなどの調整は，どの時期になされるのか，全てが10月1日では少々重荷すぎないかと思われます。まして研究室では引越しによる長期間の仕事の中断の整理の期間も考えねばなりません。ですから計画の進められる一方で，日常業務と引越作業の中に，10月以降の体制問題を密接に関係付けていかないと，ちぐはぐになってしまって，無駄なことを積み重ねるかも知れません。何か決められるまで待っている消極的姿勢でなくて，できることはすぐにでも現在の仕事の中に入れていくという積極的姿勢を我々が持つと共に，それを可能にしていく体制を作りあげていかなければなりません。

奥泉栄三郎
（図書館定期刊行物課）

昨年12月に塾全体および三田における「研究・教育情報センター計画」が正式に発表された。これは昭和36年2月に発足した新図書館計画委員会と，そのあとを引き継いだ現在の研究・教育情報センター委員会による7年間にわたる調査・研究および審議の結果が基礎となっており，それをさらに具体的に前進させたものである。

「計画」は，研究・教育情報センター委員会が示した初の総合的プログラムということができる，いわば「センター」の「憲法」である。この構想によって，慶應義塾の研究・教育図書・資料の行政管理運用面に新局面が開けるとしたら，それは一体何か。

総則論から論評すれば，研究・教育情報センター計画要綱に既述されているように「三田地区のすべての研究と教育のための図書・資料は，それを必要とするすべての研究者および学生に利用されなければならない」のであって，

①研究・教育図書・資料の量および質面における拡充
②全塾的な図書・資料の目録体制の完備と，書誌・索引を中心とした学術文献情報サービス・ツールの整備
③効果的且つ高度な諸手法をもって文献および情報をサービス実施
④図書・資料行政と情報活動の効率化

等々の目標の実現を図ることが大前提である。これを実行に移し，内容を正し，運営方針を整えてゆくことがこれからの課題であり，現実をみつめた柔軟な姿勢で，われわれもこれを逐次解決してゆかなければならない。

そこで大きな問題としてクローズアップされてくるのは，設備の問題もさることながら，人の問題～組織の問題～である。設備は借金してでも短期間に調達しうるが，人材的組織を作るには長い期間を必要とする。研究・教育情報センターについての移行上の問題点の真髄は，おっつけ大工的な個々の業務・作業の改善ではなく，むしろ，一貫総合した情報システムの樹立なのである。「計画」は当然この点にも注目しており，三田地区に限って考えてみても，まずはじめに，高度にプロフェッショナルであるゼネラリストや専門知識をもったエキスパートが確保されなければなるまい。

人文および社会科学情報が自然科学情報に比して有効寿命が長く，しかも Interdisciplinary な研究主題領域が多いことは，資料・情報の増加とあいまって，文献情報処理，文献情報検索，文献閲覧の各システム担当者に多大のセンスを強いるようになってくる。

さいわい慶應義塾には，かつて予期した以上に不即不離の関係を現にもつ「情報科学研究所」および「図書館・情報学科（学部，大学院）」が既設されているので，関連・類似機関が協働する事によって，「センター」は所期の成果を期待できる。塾の内・外を問わず，「センター」の将来は大きく発展してゆく客観的条件をそなえたと思う。

研究・教育情報センターの機能と業務

藤　川　正　信
（文学部教授
三田情報センター準備委員会幹事）

1.　序

全塾および三田における研究・教育情報センターの計画が印刷物として配布され，さらにこれまでに発表された記事なども併読されて[1]，大方の理解がほぼ得られたことと思われます。しかし，このようなセンターは，機能的な組織を確立し，充分な業務体制を設けて，期待に応えるサービスを提供することでその価値を発揮すべきものです。この点で最も考慮を要するのは，従来の組織や機能を新構想の中でどのように位置づけ，そこからどれだけすぐれた，新しいサービス機能を引き出しうるかという点でありましょう。

組織が人間によって構成され，組織全体の機能が個々の人間と，その協力により発揮される限り，組織の改変に当っては人間の問題と，人間を結ぶコミュニケーションおよびそこで用いられるコトバについて第一に検討する必要があります。特に情報センターというサービス機構については，人間の問題は，機構を形成する職員だけでなく，利用者というセンターにとってより大きな意義を持つ人々が存在し，同様にコミュニケーションについても，二通りの考え方がされなければなりません。

センター側と，利用者である教職員および学生との意思の疎通を図り，適切なコミュニケーション・チャネルを設け，かつ意思が充分に伝えられるコトバを持つためには，お互いの意図や目的や計画およびその実施段階などについて知識を持ち，理解を深めることが必要です。

そこで今回は，三田情報センター準備委員会の一員であると共に，研究・教育活動に携わる人間でもあるという立場から，主として三田情報センターにおいて今後漸次実現されてゆくと思われる機能と業務を，最初は全般的な立場から，次は専門の研究・教育の立場から最後に学生の立場から考えてみたいと思います。

2.　全般的機能・業務

従来，研究・教育活動そのものに限ってみても，広く図書や資料を利用するに当っても，一つの大きな問題は，何が塾の何処に収蔵されており，どうすれば入手できるかが分らなかったり，あるいは，入手の時期が遅れるという点にあったようです。

さらに，学問の研究領域が，一方において細分化し，他方において総合化される中で，適切な資料を主題の面から探索するのにも，困難が伴っていました。

このような点を，北里記念医学図書館では，医学という領域の特性を充分に把握しつつ解決の努力を重ね，研究者にも学生にも，以前に比べるとはるかにすぐれたサービスが提供できるようになっています。三田の情報センターでは，こういう改善策を参考にしながら，三田で主として扱う，人文・社会科学系統の学問領域に適合する文献探索の手段を検討し，それをサービス面に反映させるように努力を重ねています。

上に述べたような機能は，いちおう次のように分割して，実行に移す予定が立てられ，実行の各段階でさらに検討を加え，改善をはかりながら，目標の実現を具体化することになるでしょう。

2. 1.　資料の選択・収集

研究・教育を促進するためには，歴史的に見ても，現在の傾向を把握する面でも，すぐれた資料を充分に保有することが，前提条件となります。これは情報という側面から考えれば，最も有力な情報源を確保することを意味します。しかし，財源には限りがありますので，全塾的，あるいはそれぞれの地区とか，学問領域ごとに，無用の重複を避け，最も有効に利用できる資料を選んで収集することを迫られることは，言うまでもありません。

この際に注意を要するのは，大学という立場からは，資料の収集を微視的もしくは短期間の問題として扱うべきではなく，巨視的であり，長期に亘る計画の

もとに実施しなければなりません。そのためには，一方においては，専門の学問領域ごとに厳正な選定が行なわれると同時に，他方，大学全体の研究領域を包括し，また教育面にも寄与しうる蔵書とか各種資料の体系的構成を図ることが期待されます。その実現のために，三田情報センターに図書選定委員会を設け，学部の図書委員会とか選定委員および研究所の図書・資料の担当者などと緊密な連絡を取るだけではなく，そのような方々の中から選んでいただいた方に，センターの図書選定委員になっていただき，予算の最も有効な使い方を討議すると共に，図書・資料収集の全貌を常に把握できる体制を作り上げる準備をしております。

既に御存じのように，図書や資料の選定，発注から受入，検収，予算の使用に関する事務処理などについては，面倒でこまかい作業が伴います。これを分散してやっておりますと，費用を要するだけではなく，事務の停滞を来すことも考えられます。そこでこの面については，次に述べるプロセシング・センターで集中的に処理する計画が立てられています。

図書の選定は，学問領域の特性により研究者個人の研究活動に密着した形で資料を発見し，選択する必要もあれば，研究・教育の現状と進展の方向を捕えた上で広く出版の現状を知って，両者の関係を考慮して選定する場合も多いと思われます。こういう場合に，出版物そのものとか，出版の事情をデータとして示した出版目録，専門的書誌，索引，抄録などが備えられ，容易に利用できる状態を具現化するだけではなく，国内・国外の出版社（者）とか，編集責任機関や，発行所，書店などと連絡がとれる体制を設けることは，おそらく利用者にとって新しい便宜を供給するでしょう。この場合，センターの職員だけがサービスを提供するだけではなく，専門知識を必要とする場合は，学部や研究所の専門研究者の方々の知識と経験を得ることで，サービスを充実することを図らねばなりません。こういう仕事は，主として後述のパブリック・サービス部門で取扱うことになります。

上に述べたように資料の選定・収集に当っては，その機能を単純に一元化したり，集中化したりするのではなく，そこで要求される専門的な知識とか，全般的な問題の捕え方について予め考慮を払い，最も望ましい形で，分散化と集中化を併行させ，能率を高めると共に，長期に亘って塾独特のすぐれたコレクションを形成することを目標に置いております。

2. 2. 整理業務，各種リストの作成

図書館その他の資料部門において，選定のための準備，発注，現物の検収，分類，目録作成，索引作成，配架準備などについては外部の方々がふつう想像されているよりもはるかに複雑で，正確な作業が要求されています。したがって，このような作業を遂行するための職員の獲得とか養成は容易なことではありません。もしもこの種の作業を一元的に実施できれば，人員の有効な活動の面でも，各種作業内容を統一化するにも非常に有利になるであろうということが想像されます。

職員が持つ能力を最大限に発揮し，かつその効果を関係諸部門に及ぼすためには，次のようなことを実施しなければなりません。

（1） **環境の整備**：先述のような作業を実施するに必要なスペース，設備，機器，統一作業を実現する手助けとなる基本的な書誌や目録類などの整備。

（2） **作業マニュアルの整備**：職員が正確にかつ統一された形式で作業を行うためには，業務内容の説明と実施手順を具体例に即しながら解説したマニュアルを必要とします。すでに，この計画を進める中間段階において，分類や目録作業に関して専門委員が数次にわたる会合を持ち，マニュアル作成のための基本的事項の検討を行ないつつあります。

（3） **新刊の和書や洋書**に関しては，国立国会図書館および米国の議院図書館で発行している印刷カードを利用し，手間を省くと同時に，形式の統一を図ることができますので，その予算的裏づけを検討し，実現方を計画しています。

上述のような点で業務の能率化を実施するだけでなく，整理部門に一括して入ってくる各種資料に基き，下に挙げるパブリック・サービス部門および複写印刷部門と提携して，コンテンツ・サービスとか，研究者の個別的要求に応じうるようにリストを作成する材料の作成も，テクニカル・サービス部門で一元的に実施できるようになります。

2. 3. レファレンス，閲覧，貸出業務

利用者の利用の便宜を図り，利用を円滑化するために，パブリック・サービス部門を設けます。大学の中で研究・教育活動を充分に行うためには，それに役立つ資料を収集するばかりでなく，適切に保管し，利用者のそれぞれの立場を最もよく生かすことができるように利用のための体制が作り上げられる必要があります

す。そのために，上記の部門では，下に掲げるような業務を組織化し，実現することに努力を傾注します。

2. 3. 1. 閲覧・貸出関係

従来も各図書館や資料室で，利用者のために閲覧・貸出業務の円滑化に努力して来ましたが，総合目録を整備して，全塾的に利用者が求める図書や資料の所在を確認し，連絡組織を通して敏速に入手したり，複写印刷部門と提携して複写を得ることを容易にします。

この業務は最も早く整備ができる面であり，全塾的に体制を作り上げる面で大きな影響を及ぼします。

しかしこの種のサービスについては，図書や資料の特性および利用者の利用実態について充分な考慮を払わなければなりません。新しい組織が出来ることによって，従来より不便な面が大きく現われるようなことが起ってはなりません。この点については，パブリック・サービスに関する利用規程を作る場合に慎重に考慮し，利用者の便宜が増大するように図ります。

2. 3. 2. レファレンス・サービス関係

研究・教育活動自体は，その活動に専門的に従事する方々によって行われることは言うまでもありません。しかし，そういう活動を行う上で必要な資料の所在を確めたり，何が最近発表されているかを把握したり，隣接領域の動向の概略を捕えたりすることに多大の時間と労力を費すのは，もったいないという考え方ができます。このようなことは，専門領域の特性により，一概に言えることではありませんが，研究者の希望により，手伝いをすることがファレンス・サービスの主たる目的であります。

このようなサービスを実施するためには，サービスが書誌的センターとしての機構を持つ必要があり，前項で述べた総合目録の他に多くの書誌，目録，索引類を備え付けることが必須条件となります。この面については，関係者が既に調査を開始しており，センターの発足に伴い，漸次充実させる計画ができています。レファレンスの内容をもう少し拡大して考えますと，研究者がそれぞれの研究活動をすすめる上で必要とする施設，器材，財源などに関する質問を提示されても答えられるように，関連資料を常備するだけでなく，関係機関と直接連絡を取り，最新かつ確実な情報を提供できるような準備も段階的に進めてゆく計画を立てています。

上述のサービスの実現のためには，塾内・外と敏速・緊密な連絡ができる通信網を確保することが要求されます。この点は早急に理想的な形で実現するとは思われませんが，先ず塾内の整備から開始したいと考えています。

このような施設や機能は，言うまでもないことですが，学生に対しても必要に応じて開放され，発揮されます。次代の研究・教育者である学生に対して充分なサービスを提供することは，塾の将来を考えると非常に重要な意味を持ちますので，センターとしては充分な考慮を払っております。

2. 3. 3. 研究者に対する個人サービス

出版物その他の情報源の増大に伴い，研究者は自分の領域に関して各国で発表された文献に目を通すだけでも，多大の時間を費さざるを得ない状態になっております。そこでセンターとしては，手始めとして研究者の要求調査を行い，全般に共通するものと，個別的に必要とするものとに大別し，いわゆるコンテンツ・サービス（雑誌の目次をコピーして要求者に定期的に配布するサービス）を実現する計画を立てています。センターの機構の整備および業務の充実の段階に伴い，研究者の研究業績と研究方向を示すファイルを作成し，真の意味で個別的要求に対応しうる手段を講じてゆきたいと念願しております。

この方面の業務は，先述のテクニカル・サービス部門と緊密な連携を保って実施されます。このような点を見ても，センターの構想が一つの新しい方向を示していることが分っていただけると思います。

2. 4. 複写印刷業務

これまでも図書館本館の中に複写印刷センターを設け，教職員および学生の要求に応じて参りました。今後発足するセンターにおいては，先ず三田地区の中に既に設けられている研究・教育活動に直続している複写用または印刷用の機器の利用実態を充分に把握し，設置場所を定め，最も有効な利用ができるような方針を立てています。

機材の購入とか運用については，財源の裏づけがきわめて重要な点となりますので，センターの活動の発展に伴い，順次拡大することを計画しております。しかし，現在予想されるのは，テクニカル・サービス部門におけるカードの複写とか，先述のコンテンツ・サービスの面で最も大きな効力を発揮するであろうという点であります。

将来の見通しに立つと，現在開発されつつある PCMI（photo chromic micro image）その他の方式

の実用化に伴い，複写・蓄積・検索の手段に革命的な変化を生じることが想像できます。このような事態の推移に応じうるように，センターでは複写・印刷業務の現状および将来に関して調査をすすめ，新しい要求に応じうるように体制を整備する意図を持って動いています。

3. 研究機関との連携

情報センターは現在の要求を充足しながら，常に進展変化する研究・教育活動に対応する研究調査を行い，将来に向って計画を立て，必要な修正を続けてゆくことが重大な任務の一つであると思われます。

この線に沿って，センターは塾の研究所その他の研究機関および研究者と絶えず連絡を保ち，協調を図る方針を持っております。たとえばセンターの経営管理については，そちらの専門家の意見を徴し，コンピュータの活用その他情報処理の面では本年4月1日に発足した情報科学研究所と提携することを，センター自体の活動を評価しつつ実現してゆくでしょう。

センターの特色は，単に受身の形で要求を受け取めるだけではなく，積極的に研究調査を進め，能動的にサービス体制を整えてゆくという面にも発見されます。そうなって初めて，センターが情報センターとしての本来の機能を発揮できることになるでしょう。

4. 諸外国の例

塾の情報センターに類した例を，諸外国に少なからず見出すことができます。これらの例は大学その他の研究機関に付設されたものであり，情報源としての資料やデータを中心として，ものの提供だけでなく，それに関するあるいはそれに関連したデータや情報を提供することを目的としています。こういう設備は，アーカイブセンター，データセンター，ドキュメンテーション・センターなどという名称で呼ばれています。

これらの設備では，専門の分野をしぼって調査研究のデータを体系的に集積し，一定の利用目的に積極的に応じうるようデータを処理することに重点を置いています。これらのデータは，個々の図書文献にとどまらず，その中に含まれる語句や数字も包含する広範囲のものであります。とくに計量的データに関しては，コンピュータの利用によって数理的または論理的に効率よく処理することが，機能の中心と見なされています[2)]。

具体例として，イギリスのエセックス大学の計画の目的としては，次のような事項が挙げられています。

(1) 整備した調査データを，より高度の研究あるいは分析に役立つよう提供すること。

(2) 既存の調査データのうちから，価値のあるものを選択し保存しておくこと。

(3) 調査データを用いて調査研究者を養成するためのセンターとなること。

(4) 外部で行なわれる調査研究者の養成に適切な調査データを提供すること。

(5) 記号法の標準化など，調査方法の向上を促進すること。

(6) 調査データを，より高度に分析するための理論的方法を発展させること。

(7) 市場調査，世論調査，社会調査など，あらゆる調査データから，特定分野における諸研究の相互連関を作り出すこと。

(8) 異なった地域あるいは異なった国々で行なわれる調査研究の有合性を高めることによって比較研究に備えること。

(9) 入手しうる調査データあるいは一定の条件の下で公開される調査データの目録を作成し，頒布すること。

(10) 調査の重複を省いて，費用と時間とを節約すること。

(11) 現在空白になっている分野を埋めるには，どんな調査が必要であるかについての助言を提供すること。

上述の例は社会科学領域に属するものであり，また計量分析的アプローチが強く出ているものだと言えると思います。こういう面も勿論必要ですが，人文科学の領域は当然重視されなければなりません。

人文科学においては，最も大切なことは原典とか種々の異本をはじめとし，歴史的側面とか批評の流れなどを反映している図書や資料の収集と，その記録作成と，便利な利用にあると考えられます。センターではこの分野にも重大な関心を払い，これまでの図書館や文庫や研究所の収書の実態を把握し，収書の基本本針を再確認し，必要な支持を財政的にも機能的にも提供することを意図しております。

この紹介文においては，情報センターの意図と計画の大略を述べたに止まりますが，この計画が実現するには，センター関係者はできるだけの努力を払いますが，研究教育活動に従事する教職員および学生の理解のある支持が何よりも重要な意味を持ちます。読者諸兄の御意見とか御示唆を心から期待して，本稿を終ります。

1) 参考文献
"特集—研究・教育情報センターの構想" 三田評論 no. 667, Jan. 1968.
"慶應義塾研究・教育情報センター委員会報" 八角塔,(慶應義塾図書館) no. 1, Jul. 1967.
"情報センターニュース" 八角塔 no. 3, Mar. 1968
"これからの大学図書館" 八角塔 no. 4, Dec. 1968
藤川正信:"大学の気流—研究・教育情報センターの計画", 塾 Vol. 7, No. 2 Apr. 1969.
"研究教育情報センター発足へ" 大学ニュース, No. 300, Feb, '69.
2) 伊大知良太郎 他編:社会科学ドキメンテーション ——その情報特性と利用—— 丸善, 昭和43 p. 92—94.

慶應義塾研究・教育情報センター 計　画　(抄)(注)

I 研究・教育情報センターの計画

1. 目的および機能

研究・教育に必要な資料および情報は,従来各キャンパスの図書館,研究室,研究所などによって提供されてきた。しかしながら一方においては,義塾の研究・教育の体制整備の必要が説かれ,他方においては各専門領域の総合化ならびに分化に伴ない,周辺領域の情報に対する要求とともに,より専門化した特殊な情報要求も増加し,このため従来の提供方法ではもはや現状に応ずることが困難となった。この状況を克服し,従来の不備な点を是正し,経済的で効果的な組織的情報提供を行なうことが,当センターの任務である。

従って,当センターの機能は,研究・教育関係情報の提供施設および活動に関する経営管理の効果的集中化を実施し,かつ専門学問領域別の情報要求の特性に応じ得るごとく情報活動の具体化をはかる点に発揮されなければならない。

(注)「慶應義塾研究教育情報センター計画」昭和43 20p.

2. 組織・機構

当センターの組織・機構は,大学の全キャンパスおよび全学問領域にわたる視野の下に考えられなければならない。

当センターは塾長直属とし,全塾的なセンター長の下に,三田,日吉,医学,理工学の四つの地区(または専門領域)センターをおく。なお,当センターの全般的な組織・機構については計画書〔図I〕に示すとおりとする。

また,これら組織・機構上の各ポイントについては,概ね次のように考える。

(1) 研究・教育情報センター長

当センター全般の統括者,代表者。商議会に諮問して塾長が任命する。任期2年。

(2) 研究・教育情報センター商議会

制度上はセンター長の諮問機関とするが,実質的には全塾の図書行政について審議・調整をはかる場とする。構成はセンター関係者のほか,学部および研究所の代表者を中心としたメンバーによる。会議は年2回程度定例に開催する。

(3) 地区(または専門領域)センター長

全塾的なセンター運営の基本方針にもとづき,地区(または専門領域)センター組織を統括し,代表する。任命は,商議会に諮問して塾長が行なう。任期は2年。

(4) 地区(または専門領域)センター協議会

各地区(または専門領域)センターの事情に応じて,地区(または専門領域)センター長の諮問機関として置くことができるが,この機能を代行できる機関が別に存在する場合(学部教授会等)は,置かなくても良い。構成メンバー等は各地区(または専門領域)センターの事情によって異なる。

商議会と異なってかなり具体的な問題もとりあげて審議する必要があるので,会議は定期的に,またかなり頻繁に開かれる必要がある。

(5) センター長会議

公的な意思決定のための会議体ではないが,実質的には,予算・人事その他重要な事項について,センター執行部の間で調整・連絡と意思統一をはかる場とし,定期的かつ頻繁に開くものとする。

(6) センター事務局

センター事務局では，企画・研究開発についての業務と，全塾的な総務業務とを担当する。

センター内部の権限関係については，予算執行権は原則として地区（または専門領域）センター長に委譲すべきであり，一方，人事管理についてはセンター内は同一基準で扱う必要があるため，諸施策の立案についても，全塾センターのレベルで考えられることが望ましい。

3. 将来の財務運営の基本制度（提案）

当センター将来の財務運営の基本制度として，次の方策を提案する。

(1) 義塾の年間消費収入の一定割合額と，当センター自身が受益者負担サービスから得る収入とを以て運営の資金源とし，その範囲内で人件費をはじめ当センター運営のための諸支出を負担する。

(2) 施設その他の資本的支出については，義塾の収入のうち特定の収入をこれに充当する。

(3) 上記の「一定割合」および「特定の収入」については，財務担当常任理事（もしくは財務担当部門）と協議して決定する。

4. 人事管理制度

当センターに要求される機能を発揮するうえで最も肝要な点は，センター業務に従事する職員の数の獲得と同時に，質的な向上を達成することである。これについては，全塾的な専門職制度の確立が本来の大前提であるが，その一部としての情報センターにおける専門職制度の確立を早急にはからなければならない。

これらの問題については，センター内に特別の専門委員会を設けて具体的に立案をはじめる必要がある。また，専門職員の教育研修・訓練の方策についても，統一的基準と長期方針のもとに実施に移されることが必要である。

II 研究・教育情報センターの準備活動

当センターの発足を昭和44年10月に置き，その前後の活動については次のような方針で予定を組む。

1. 全塾センター（研究・教育情報センターの上部組織を指す）の活動方針

昭和44年4月から9月までを実質的な準備期間とする。準備実施機関として，センター準備事務室をおき，準備実施の責任者として準備事務取扱（正式名称は準備本部長）をおく。

9月末日をもって移行を完了し，10月以降は全塾センターとしての新体制にしたがって運営が行なわれる。具体的には，各地区（または専門領域）センター内部の組織，業務の調整，コンピューター導入に関する問題等を含めて，当センター業務の完全稼動と改良を推進することとなる。

2. 各地区（または専門領域）センターの活動方針

(1) 三田研究・教育情報センター

昭和44年4月から9月までを実質的な準備期間とし，全塾センターの準備実施機関が三田センターの準備事務をも行なう。なお，準備問題についての審議機関として三田センター準備委員会を設ける。

10月以降は三田センターとしての新体制下で業務が行なわれるが，昭和44年度中は，業務内容の点ではセンター計画の目標に移行するための過渡期として位置づける。

(2) 日吉研究・教育情報センター

昭和44年度においてできるだけ早急に，日吉センター準備委員会を設け，日吉センター構想を明らかにし，併せて実施準備を行なう。

(3) 理工学情報センター

全塾センター構想の方向に沿って，現在工学図書館が中心となって行なっている計画を推進するが，日吉移転に関して，日吉センターとの関係を検討する。

(4) 医学情報センター

全塾センター構想の方向に沿って，現在の医学図書館を発展させるものとする。

三田研究・教育情報センター
計　画　(抄)(注)

1. 三田研究・教育情報センター計画要綱

「慶応義塾研究・教育情報センター計画」の基本的理念に鑑み，三田研究・教育情報センターは，次のような要件を満たすものでなければならない。

(1) 三田地区における研究と教育のための図書・資料は，そのすべてが三田における研究と教育を支えるよう収集されなければならず，また将来においても十分にその役割を遂行し得るように発展させていかなければならない。

(2) 図書・資料は，それを必要とするすべての研究者および学生に利用されなければならない。そのためにも，図書・資料の検索のために三田だけにとどまらず，全塾に一貫した目録体制を備えなければならない。

(3) 三田地区における人文・社会科学の広範な分野，さらに各専門分野における研究と教育のために必要な文献と情報を研究者や学生が的確かつ迅速に把握・入手できるためのもうひとつの手段として，レファレンスサービスシステムも整備されなければならない。

(4) 図書・資料の入手，およびその広範で有効な活用のために，また，収集された図書・資料の情報をできるだけ速やかに研究者に伝達するために，近代的な機械設備に基づいた文献複写・印刷サービスが重視されなければならない。

(5) 三田研究・教育情報センターは，以上のような機構を備えた近代的学術研究・教育文献情報活動を経済的かつ効率的に行なわなければならない。

(注) 「慶応義塾三田研究教育情報センター計画」昭和43　20p.

2. 三田研究・教育情報センターの機構とその管理

三田研究・教育情報センターは，上記の要件を満たすために，以下のような諸業務単位を備えた機構をもたなければならない。

(1) 三田研究・教育情報センターのなかに，プロセッシングセンターを設置して，現在分散的に行なわれている図書・資料の収集（図書・資料の選定を除く事務のみ）と受入に関する業務および整理業務を機能的に統合する。そうして，より効果的なテクニカルサービスシステムのもとに，それらの業務を整備・改善して，義塾のビブリオグラフィックコントロールの基盤を作る。

(2) 三田研究・教育情報センターに，利用者のタイプ（研究者と学生）や研究者の専門主題などに応じて，(a)各専門主題別の研究図書・資料室（現在の研究室，研究所にあたるものを指す），(b)人文・社会科学全般または，多くの専門主題を包括して，文献・情報サービスを行なう総合研究図書館，さらに，(c)学習・教育のための図書・資料に関してサービスを行なう学習図書館を置く。そして，それぞれが，それぞれの利用者を重点的にサービスすると同時に，常に相互の機能的な連繋を密にして，全体で三田の研究・教育を強力に支援する。

(3) 三田研究・教育情報センターに，大規模なレファレンスサービスシステムを作りあげる。これは，総合研究図書館のなかにおかれるレファレンスサービスの組織・施設が中心となって，上記の各専門主題別研究図書・資料室および学習図書館における同種のサービスと連繋を保つ。

(4) 三田研究・教育情報センターに，近代的複写・印刷機械を備えた複写・印刷センターを設ける。複写・印刷センターは，その機械設備を活用して，図書・資料のより広範で，円滑な利用を促進するとともに，収集された図書・資料の文献情報を迅速に研究者に伝達する。また，複写・印刷センターは，塾外（国内・国外を問わず）の文献複写サービスを利用して，研究者が必要とする重要な文献の入手を援助する。

このような機構を備えた三田研究・教育情報センターの管理運営は，三田地区における全体的組織（全塾の研究・教育情報センターの一部となる）として，一元的に管理されるべきである。しかし，三田各学部の特殊事情，従前の慣例などを考慮し，関係各組織・機関の協力体制を基盤としながら，漸次，研究・教育活

動の統合に進むべきである。管理運営の実際については，情報センター長が，それを補佐するセンター協議会に諮り，三田研究・教育情報センター全体の運営方針を決定し，それに基づいてセンター全体を管理するという管理方式を，原則として採用すべきである。

3. 三田研究・教育情報センターの人事計画

三田研究・教育情報センター計画が実施に移され，それが真に三田地区の研究と教育を直接補助するという役割を発揮するためには，十分なセンター要員を確保することが肝要である。これについて研究・教育計画委員会は，情報センター実現のために最も基本となるものであるから，センター要員に関する人事には，とくに配慮することが必要であると答申している。

同答申の指摘のとおり，情報センターにおける人事計画，センター職員の研修・訓練，専門職制度の確立などの問題は，情報センターの任務遂行の成否を決定する重要な鍵のひとつであると考えられるので，三田地区のみならず，全塾的な研究・教育情報センターのレベルで，専門委員会を設けて早急に検討を始めなければならない。

4. 研究・教育情報活動におけるコンピューターの導入

三田研究・教育情報センターにおける文献情報活動の高度化，効率化をより前進させるためには，将来，コンピューターを導入して，それに基づいた業務サービスシステムの確立を計る必要がある。これについては，前記研究・教育計画委員会においても，研究活動の補助手段として科学技術の成果を採り入れることに留意し，コンピューターの導入について積極的な努力をする必要があると答申している。

この問題に関しては，全塾研究・教育情報センターの発足を待ち，センター事務局内に置かれる企画・研究開発担当部門によって十分に調査・研究がなされ，でき得る限り速やかに高度のサービスが実現されるように計画されなければならない。

5. 三田研究・教育情報センターの施設

三田研究・教育情報センターの施設は，現在の施設・設備（図書館・研究室などにおける）を活用することを基本として整備され，改善されるが，昭和44年10月完成予定の新研究室後半部分を有効に利用できるよう計画しなければならない。また，その部分は渡り廊下によって図書館と直結されるが，これに関しても，廊下をはさんだ両側の建物に置かれる情報センターの施設を有機的に連繋させることに留意しなければならない。

また，数年後に予定されている研究室建物のL字型アネックスの建設計画に際し，建物の利用を前もって十分に検討すべきである。これについては，建築に関する専門委員会を速やかに発足させて，調査・研究を推進しなければならない。

6. プロセッシングセンターの機構

(1) プロセッシングセンターは，現在，分散して行なわれている収集（図書選定以外の事務的作業），受入および整理などの業務を機能的に統合して一元的に行なう。従って，以下に掲げる業務を行なう。

(a) 見計，寄贈，交換などの図書・資料の受付に関する業務

(b) 重複調査などの図書選定準備，図書選定に関する事務，および発注などの業務

(c) 図書・資料の登録，会計などの受入業務

(d) 目録，分類，印刷目録カードの作成，図書装備などの整理業務

(e) 閲覧目録体制の維持や総合目録編纂に関する業務

(f) 収書情報の伝達（収書速報やコンテンツサービス）やカレントアウェアネス文献情報サービスに関する業務

(3) プロセッシングセンターは，利点を得ることができる。

(a) 業務をプロセッシングセンターに集中することによって，各サービス拠点では，パブリックサービスに専念でき，研究者や学生に対して適切なサービスが行なえる。また，全体として，有効な人員配置などが可能となる。

(b) 各書店から持ち込まれる最近刊の図書・資料や近刊のアナウンスメント類が一カ所に集められ，図書選定には便利であり，また，個々の研究者の選書にも便利なブラウジングコーナーができる。

(c) 重複調査などの図書選定準備作業が十分に行なえ，不必要な重複が避けられる。

(d) 図書選定者（各学部図書委員，図書館図書選定者，研究所図書選定者など）が，図書・資料の購入に関して相互に協議しやすい体制がとれ，三田における計画的な収書が可能になる。

(e) 寄贈や交換図書・資料の受付を集中することによって，これまでにあった資料の散逸が防げる。

(f) 目録法の統一が計られるので，目録作業の能率が向上し，目録カードや収書速報などが標準化され，総合目録の編纂が容易になる。

(g) 主題からの文献探索方式の統一を考えれば，三

田のすべての図書・資料が一定の方式に従って，主題から探すことも可能になる。

(h) 総合目録をはじめ閲覧目録体制が整備されるので，三田にある図書・資料の検索が効果的に行なえる。

(i) プロセッシングセンターにおける業務システムが整備されると，収書速報やコンテンツサービスが研究者に提供され，また，文献分析の体制が整えば，高度の近代的文献情報サービス，たとえば専門主題別の雑誌・索引類，レビューサービス，プロファイルサービスなどが研究者に提供され，研究を強力に援助することができる。

(4) プロセッシングセンターは，合理的な業務システムに基づいて運営されなければならないが，以上のような効果をあげ，さらに，プロセッシングセンターの業務を円滑に行なうために，有能な要員を十分に備えなければならない。

7. 図書・資料利用システム

(1) 三田の研究・教育図書・資料は，利用者のタイプ，すなわち，研究者と学生の利用のために，研究図書・資料と教育・学習図書・資料のグループに分ける。研究図書・資料グループは，さらに，研究者の専門分野によって分けられるものと，三田の数多くの人文・社会諸科学に共通して利用される総合的人文・社会科学研究図書・資料に分ける。そして，それぞれの図書・資料コレクションを中心にして，閲覧や貸出，それにレファレンスなどの業務を行なうサービス拠点を置く。それぞれのサービス拠点は，それぞれを利用する研究者または学生に対して重点的にサービスすると同時に，相互に連繋して全体で三田のすべての研究者と学生にサービスする。

(2) こうした利用システムの利点は，利用者のタイプや専門分野によって，図書・資料を部門化できるので，それぞれの利用者に最も適切な図書・資料の収集ができる。そして，人文・社会科学分野全般にわたって収集・発展させていく総合研究図書・資料コレクションを置くことによって，部門化で起こる弊害を除くことができる。

8. レファレンスサービスシステム

(1) レファレンスサービスは，基本的には，すべてのサービス拠点で行なわれるべきである。しかし，レファレンスサービスが，研究者や学生にとって有効であるためには，文献情報サービスあるいは図書館サービスのすべてのプロセスについて必要な技術や知識はもとより，研究と文献情報サービス，あるいは，大学教育と図書館サービスの関連を確実に把握しているスタッフ（レファレンスライブラリアンおよびそれを補佐するスタッフ）が相当数必要であり，さらに，そうしたスタッフが種々の形のレファレンスサービスを行なうための参考図書・資料コレクションが完備されていなければならない。このサービスの本来の目的は，研究者や学生が非常に複雑になっている今日の文献・情報サービスシステム，あるいは図書館サービスシステムを利用するときに，レファレンスライブラリアンが個々の利用者の立場に立って，そのシステムを最も有効に活用できるルーティンを見つけ出し，それを利用者に助言したり，あるいは，レファレンスライブラリアン自身が，そのルーティンに従って利用者の求めている文献や情報を探索して提供することである。

しかし，それぞれのサービス拠点で完全な体制をとってサービスすることは，現実の問題として困難である。従って，現在本館に置かれているレファレンスサービスの組織，参考図書・資料コレクション，およびその施設を拡充して，それを情報センターにおけるレファレンスサービスの中心として，他のサービス拠点と関連させるシステムをとる必要がある。

(2) レファレンスサービスが，その目的のとおりに十分効果的に実施されると，研究者が文献や情報を入手するために費していた時間を短縮することが可能になる。その場合，研究者がレファレンスライブラリアンに自分の研究に必要な文献を探させることも可能になる。教育の面でも，学生に対して文献や情報の探索法を指導するのに要していた教員の負担を軽減し，学生に対しても，図書館の利用を正しく理解させることによって学生の自主的な学習や研究を促進することができる。

9. 複写・印刷センターの機構

複写・印刷センターは，まず近代的な高性能の複写機および軽印刷機を備え，文献複写サービスを行なって，三田の図書・資料の広範かつ円滑な利用を促進する。また，印刷目録カード，文献リストなどを作成して，塾内のビブリオグライィックコントロールのために必要な目録カードの標準化を計り，さらに収集文献の情報を迅速に研究者に伝達する。

複写・印刷センターは，さらにレファレンスサービス部門と協力して，塾外，海外の学術図書館からの複知識に精通し，かつまた，学術研究の専門各主題の写文献の入手サービスを提供して，研究者の便を計る。

《抄　訳》

Wilder, D.

"Management attitudes; team relationships" Lib J: 498-502, Feb '69.

多くの図書館人が "professional" と "librarian" という言葉を同義語として混同し，またはそのように洗脳されてきた。まだ，ライブラリアンは自分達が教育・訓練をうけていない問題に就て，意思決定を強いられる立場に自らを置いたとき，結果的に適切な図書館サービスの提供に失敗してきた例が余りにも多い。総体としての図書館業務及び意思決定のプロセスに就ての本来的分析に我々が失敗して来たという事実は次の点にもしめされる。即ち専門的 (professional) 職務から非専門的 (clerical) 職務をうまく分離できなかったこと (fumbling attempts); 図書館は要求される情報の提供と応ずるべき組織体 (knowledge-orientel organization) であると同時に一大企業体 (**big business**) であるという認識を拒絶し続けて来たことである。多額の予算の執行に関して意思決定を行う人とは "clericals" ではない。我々図書館人は本に就いて知っているという。しからば我々は本に就いて何を知っていると言えるか？　例えば，本はナットやボルトと違うことは確かである。しかし，そのナットやボルトの取扱いも又それぞれ異った技術を要するものである。何故に本は特別であらねばならぬのか？　そこで「ライブラリアンでないものはすべてプロフェショナルではない」ということは忘れよう。現在多くの図書館の長又は主任者 (heads) はライブラリアンであるので，それを補佐する地位 (the number two position) に経験と訓練を経た有能な**マネジャー**，または**管理者** (business manager or administrator) を置くことに私はちゅうちょしない。危険なことはライブラリアンのみがプロフェショナルであるという考えにとらわれてしまって，**専門家としてのマネジャー** (professional manager) を求めないで，専門的な管理機能を果すべき所に clerk を雇用することにある。図書館にとって秀れた管理者としてはシステム・アナリストが第一番である。

このような管理機構の下で "librarianship" とは一体何を示すか？　①図書選択及び蔵書構成の発展，選択された図書・資料の識別又は確認である。それは選択決定後の発注，受入，支払，出納記録の管理などではない。②目録作成 (original cataloging) 及び利用者にとって有効な目録システムの開発であり，ＬＣカードの修正や雑誌記録の追加ではない。③図書・資料を製本するか，パンフレット扱いにするか又は廃棄すべきかに就いての決定を行い，製本記録の管理や製本業者との契約問題ではない。④インフォーメーション・サービス，即ち利用者に対する効果的情報・資料の提供の道を発見することであり，貸出，雑誌のチェック・イン或は書庫管理ではない。以上「……ではない」と述べた部分が，いわゆる "library administrator" 又は "manager" の領域に置かれねばならない。ここでは我々が長年にわたり努めて来たパブリック・サービス部とテクニカル・サービス部の二分立を除き，その二分立はむしろ **Bibliograpihcal** (又は **library**) **Services** と **Operational** (又は **management**) Services とに分けられるであろう。

プロフェションとしての責任の一つに，その専門領域を前進させる基礎的研究調査がある。ここにもう一つの新しい機構として **"librarians for library Service"** とも言うべき職分がある。このメンバーは如何なるライン的責任もない，即ちどのセクションにも直属することなく，例えば①最良の蔵書の形成に就ての検討，②諸種の業務の改善に就ての実際的助言，③特に重要なことは，このメンバーが研究部門 (academic depts.) と密接な関係を保つことによって我々の仕事に対する積極的理解が得られることである。

ライン系列の集合としての組織体であると同時に，図書館は知識の発見，保存，応用，普及のために存在する組織である。従って後者の側面に就ては命令系的な状況 (command situation) だけでは満足されえない部分である。ここでは館長または各部門の長と他の責任ある立場にあるスタッフ ("responsible members of the staff" とはライブラリアンであるなしに拘わらずすべての専門職員のみならず，ルーティン業務の遂行と重要な責任を果している clericals も含める) との間の関係は同列の立場の中のリーダー又は代表者 (primus inter pares) ということになろう。この業務遂行上の "command situation" と基本的方針の決定に於ける "primus inter pares situation" とを理解することは我々ライブラリアンにとって今後益々必要とされるところのものである。

図書館ニュース

図書館建造物の重要文化財の指定

図書館本館の建造物はすでに日本建築学会から明治末期煉瓦建築の代表的遺構として注目され，特に設計者曾根中條両氏の建築技法について研究されて来たが，43年9月以来文部省文化財保護委員会から国指定の重要文化財とするよう奨められることがあった。その後その方面の専門家である谷口吉郎博士の推奨もあり，塾として重要文化財の指定を受けることに決定した。内示は43年11月に，正式発令は44年3月12日文部省告示第36号によってなされた。指定の内容は面積684.4m²，2階建，地下1階，1部3階，書庫6層，亜鉛引鉄板葺，（正面玄関広間，階段室以外の内装を除く）とあり，併せて設計原図65枚，及びステンドグラス原画（和田英作筆）1枚を含むものである。図書館としてはこれを記念し43年12月12日～14日の間，館所蔵の善本稀本150余点を展示紹介すると共に，記念絵葉書を作製し頒布した。

指定図書について

昭和42年度から実施した学部学生を対象とする指定図書制度は初年度に引きつづき43年度も行ったが，学園紛争等の不測の事態も災して当初の計画に達せず，収書157冊にとどまった。そもそも指定図書制を考える場合現在の学部学生数も問題であるが，より完全な形の指定図書制実施には予算スペース等に大きな隘路がある。例年ゼミ乃至専攻を1単位に教員諸氏の熱心な御協力により実績を上げているもので，本年もこの趣旨によって指定図書の収集を得たいと願っている。教員大方の一層の御力添えを乞う次第である。

オフセット印刷機A. B. Dick 325B型の導入

現在図書館で保有使用中の印刷機 A. B. Dick 320B型は印刷能力の性能に定評はあるが，図書カードの印刷に難点があり，今後ますますカード印刷の需要が高まり，研究教育情報センターの発足を見越した上での印刷サービスの多様化を予想するとき，在来のものの外に特にカード印刷専門の新鋭オフセット印刷機として A. B. Dick 325B 型機を導入する計画を立てた。幸にしてこれが認められるところとなり最近搬入される見込みである。

価格　約1,309,500円

私立大学等教育研究費補助金による図書の購入について

昭和43年度から始めて施行された文部省の上記の補助金制度は，私立大学における教育研究条件の充実改善と経営の健全化を目的とし，経営予算を少しでもカバーする方向で実施されたもので，その補助対象を当初は機械器具及び図書など有形物に限定した。従って割当補助額の相当部分を図書により消化せざるを得ない結果となり，塾においても図書館・研究室始め大学の図書施設の各部署はそのための補助金対策に忙殺されることとなった。たまたま文部省のこの補助金に関する内示が12月に入って行なわれたという切迫した事情から，各部署ではすでに経営図書費により購入し整理を完了していた図書資料の中から，文部省の示す交付条件（金額10万円以内その他）に適うものを選別し，それらを年度始めに遡って補助金による購入分として振替える作業を担当せざるを得なくなった。しかも手続上官庁提出に必要な書類作成及び現品処理の条件に合った業務を要求された結果，部署によっては本務を中断し臨時にアルバイトを導入するなどの手段により全力を上げて対策に当ったが，広範多量な図書資料の収集に伴う事後処理は年度を越えてこの5月に入るも片づいていない。

この補助金制度の交付条件が複雑かつ厳重であることは初年度であるために起った現象なのか，このような状態は一時的にもせよ大学の教育・研究条件の充実改善の趣旨に逆行する事態を生じ，利用者にも多くの不便をまねいている。ここに第2年目を迎えた今日この制度は引続き実施される見通しであるから，昨年と違って補助金交付の条件その他実状に適った運営が望ましいことは言うまでもない。私立大学図書館の全国組織である私立大学図書館協会がこの問題を取り上げ，私大連盟等上部団体の手によりこの4月文部省に手続きの簡素化，1点の金額10万円の枠撤廃等交付条件の改善方を申入れ，可成具体的に前向き処理の方向で反応があったと伝聞している。43年度には認められなかったマイクロフィルム，視聴覚資料等図書以外の資料を補助対象とすることは最も大切であるし，雑誌類・分冊形式の図書等の合冊製本などに必要な製本費もいわば図書費の一部と見做されるべきであるから，

補助金の対象に組入れるなどどしどし改善されるよう強く要望したい。

更にこの補助金を受けるに当り図書に直接関係ある各部署が過重な負担を受けたにとどまらず，経理及び庶務等一般事務部門にも同様の混乱と繁忙を招いたが，ともかく全塾的協力と連繋がここまでやったという感じで特筆されるべきであるし，今後の補助金受入の体制を考える上で誠に貴重な経験となった。億という金額の数字の重みが全塾の補助金業務を担当する部署のおよそ日常業務を圧倒する実態に，当局始め関係者すべてが注目すべきであるし，直ちに一致協力してより一層合理的な対策を確立してゆくことが最大の急務であり，それしか補助金受給による塾財政の健全化に方向はないと思われる。

三田文学ライブラリーと万太郎展

つい先だっての，5月6日から11日にかけて，日本橋三越で三田文学ライブラリー主催の久保田万太郎展がひらかれたことは御承知の方もあろうと思う。万太郎の著作や句稿に加えて，屏風や色紙，舞台装置から衣裳にいたるまで，幅広い華やいだ展覧会であったが，これらは勿論図書館内にある三田文学ライブラリーの単独の努力でなく，むしろ完結した万太郎全集編輯室や，故人の主宰した俳誌「春燈」同人や万太郎に関係深い演劇方面の人々の尽力にあって，三田文学ライブラリーはただそれにおんぶされただけのものではあったが，それにしても図書の陳列の大部は三田文学ライブラリー所蔵品をもととし，その部門の担当責任をとった。創立3年にして三田文学ライブラリーもここまで成長したというべきであろう。

昭和41年の春頃から話が始まって，久保田万太郎基金からの資金援助を得て，慶応義塾に関係ある文筆家の蒐集をしようというのである。そして一度に手を拡げて，蒐集作家の作品に精粗が甚しくなるのを嫌って，先づ第一期蒐集作家群をきめて，蒐集の成果につれて範囲を拡大することになった。第一期の目標作家は42名の物故作家と現存の芸術院会員4名が選ばれ，その作家の著書（成るべく初版本），の外書簡，日記，原稿，筆墨の類も集めることになった。勿論この範囲をこえた作家のものも，他日手にし得なくなるようなものはこの際，蒐めることにやぶさかでなかった。又，三田関係の雑誌類も蒐集対象であった。そして図館書長がライブラリー長を兼ね，蒐集物は図書館の八角塔の2階，3階に収められた。

現在図書は大約1,600冊，原稿は60部，書簡類は170通，その他色紙，短冊，句稿，油絵日誌，アルバムなどもぽつぽつ集まっている。これら蒐集作者名と作品類の内容は本年5月に「三田文学ライブラリー目録」が刊行されたからそれを御覧願いたい。図書館にお申込みがあれば，無料で差上げます。

資料の閲覧は公開とまでは行っていない。専門研究者には申出があれば御便宜を図るという程度である。なるべく初版本の原型をとどめ，書幅や原稿や書簡などの特殊資料の保存に努力して，真の専門家の研究に役立てたいためである。八角塔内部の施設も改装を加えている。本年度中には，ここの専門利用者にもより良い環境作りが出来ることと思う。

（伊東弥之助　図書館運用部長）

情報センター設立準備業務の現況

昨年末に答申された「情報センター計画書」に従ってその設立準備を担当するために，4月1日から次のような体制が発足した。

1. 情報センター準備本部長
2. 情報センター準備事務室
3. 三田情報センター準備委員会

準備本部長は情報センター設立準備事務の総括者として位置づけられており，佐藤朔君に引続き，現在は高鳥正夫君が就任している。

準備事務室は6名の専任職員を擁し，新研究室棟一階の事務室において具体的な準備作業を推進中である。

三田情報センター準備委員会は，特に三田情報センターの設立に関係する重要事項について関係者の合議を経る意味から，準備本部長の諮問機関として設けられたものである。

なお，上記の公的な体制に加えて，執行部会議ともいうべき「本部会」，事務連絡会としての「スタッフミーティング」，専門部会的な性格をもつ各種の「ワーキンググループ」等を発足させて，具体的な業務の推進をはかっている。

「最近の大学問題にかんする雑誌記事の紹介」

研究・教育情報センターの構想もいよいよ軌道にのり，その具体化に向って着々と準備が進められている。標記のような Current な文献情報サービスは，従来から本館の参考調査課で利用者の求めに応じ，又その要求を予測して，レファレンス・サービス月報等を通して利用者の便に供しているが，今後，研究・教育情報センターの発足にともなって，この種の Current Awareness 文献情報サービスは，さらに拡充されていくことになろう。

そこで今回は，文献情報サービスの一環として，塾内に所蔵されている雑誌の中から，'68年1月以後に発表された「大学問題にかんする記事」をスクリーニングして，収録誌別に紹介してみた。和文の記事は医学関係の記事を除いて**特集記事**に限った。

なお，大学問題に関する資料は審査室でも蒐集している。朝日・毎日・読売・産経・日経，その他，日本教育・教育学術の各新聞記事の切抜きを大学別にファイルし，又雑誌記事については，「私学新報」，「大学ニュース」，「時事通信」，「朝日ジャーナル」，「エコノミスト」，「中央公論」，「世界」，「大学資料」，の記事，および「文芸春秋」，「現代の眼」，「展望」の各特集記事を抜萃し備付けている。

和雑誌

朝日ジャーナル

'68. 10. 6　「秋をおおう学園紛争」特集
'68. 10. 20　「日大・東大紛争最終段階へ」特集
'68. 11. 17　「大河内総長の辞任―"権威"の崩壊」特集
'68. 11. 22　「社会爆発としての大学紛争」特集

中央公論

'68. 5　「反抗する学生たち・その内側からの把握」特集
'68. 9　「深まりゆく大学紛争の中から」特集
'68. 11　臨時増刊（学生問題特集号）
'69. 3　「東京大学　1969年1月」特集
'69. 4　「西へ波及する学生運動」

文芸春秋

'69.　新年特集号「東大紛争の嵐の中で」
'69. 2　「大学紛争のもう一つの視点」
'69. 3　「特集　東大最後の日」
'69. 4　「特集　東大紛争の発火点」
'69. 5　「特集　苦悩する大学教授」

現代の眼

'68. 12　「緊急特集　新宿10. 21の激突」
'69. 1　「　〃　学生は蜂起する」
'69. 4　「　〃　新しき造反の場―京大と立命館」

自　由

'68. 6　「特集　世界の青年不満と反抗の世代」
'69. 1　「百七十三時間の真実，東大紛争の渦中にあって，《私は考える》大学問題の解決」
'69. 2　「特集　学生参加と大学」
'69. 3　「緊急特集　嵐の中の東京大学」
'69. 4　「総点検　日本の教育」
'69. 5　「大学改善の具体的方向」

思想の科学

'68. 4　「学生運動と大学の自治」特集

世　界

'69. 3　「特集　試練に立つ大学の自治」
'69. 4　「特集　続試練に立つ大学の自治」

新聞月報

'68. 11. 10　「特集　学生デモに騒乱罪適用」
'68. 12. 10　「特集　最終段階をむかえた大学紛争」
'69. 1. 10　「特集　新段階の大学紛争」
'69. 2. 10　「東大，警察力で占拠排除」
'69. 4. 10　「新学期をむかえた学園紛争」

洋雑誌

Foreign Affaires. 47. Oct '68

Revalutions and reaction in France.

Nation

206 : 535-8 (Apr. 22. '68)

Dilemmas of resistance ; New Uriversities Conference.

207 : 313-15 (Sep. 30. '68)

Leaping ahead of theory ; debate about may event.

207 (Aug. 19. '68)

Students of New Paltz : a nice little revolution.

207 (Oct. 28. '68)

Columbia : onus of violence ; Cox commis-

sion report.

New Left Review No. 53 (Jan-Feb. 1969)

- A revolutionary student movement.
- Revolutionary socialist student's federation.
- The student action.

Newsweek

May 6. '68. p. 23-31
Special report "Student protest here and abroad.

May 13. '68. p. 59-60
End of a siege, and an era ; revolt at Columbia.

May 27. '68. p. 44-44B
France at the barricades.

June 3. '68. p. 30
Student power at the barricades.

June 24. '68. p. 42-3.
Student radicals ; excerpts from discussion on BBC TV.

Sept. 9. '68. p. 24-26.
Lots of law, little order.

Sept. 30. '68. p. 37-42.
Rebels on the campus.

Sept. 30. '68. p. 63-8
Campus rebels : who, why, What.

Dec. 16. '68.
Escalating troubles.

Dec. 18. '68
Guerrillas on campus ; move from protest to resistance at S. F. State.

Jan. 20. '69. p. 32-34.
Californias State-college crisis.
Black revolt on Campus.
The Shape of trustee power.

March. 3. '69. p. 38-39.
Backlash against the Campus guerrillas.

March. 10. '69. p. 38-43.
How to deal with student dissent.

March 31. '69. p. 54.
Columbia today.

April 21. '69. p. 36-37.
The 'bust' at Harvard.

April 28. '69. p. 44-47
The campus spring offensive.

May. 5. '69. p. 6-10.
Universities under the gun.

Phi Delta Koppan. 50. Sept. '68
Does student power equal democracy's strength?

Saturday Review

May 18. '68.
What are young people telling us?

July 20. '68.
Smersh strikes the campus.

July 27. '68.
College presidents and students unrest ; Kettering conference.

Aug. 17. '68.
Changing the balance of power.

Aug. 17. '68.
View from the campus : Latilude at protest.

Nov. 2. '68.
Student power : the rhetoric and the possibilities ; exerpts from Education and the barricades.

Science

Feb. 9. '68.
Pot and politics : how they busted Stony Brook.

May 17. '68.
France : the latest eruption of the internationale student revolt.

May. 31. '68.
French student revolt : an account of the origins and objectives.

June 14. '68.
Student unrest : administrators seek ways to restore peace.

July. 5. '68.
Student protest : a phenomenon for behavior sciences research.

Nov. 22. '68.
Columbia university : still at the crossroads.

Time

Jan. 26. '68.
Dawn patrol ; students under arrest at Stony Brook on drug charges.

May. 5. '68.

Why those students are protesting?

May. 10. '68.

Lifting a siege, and rethinking a future : Chaos at Columbia.

May. 17. '68.

Battle of the Sorbone.

May. 17. '68.

How much power?

Aug. 23. '68.

France ; the hope of reform.

Oct. 18. '68.

Response to destruction : dismissal of director of Afro-American student center N. Y. U.

April. 18. '69.

Harvard and Beyond : The University under siege.

Times Education Supplement

May. 10. '68

Self-goverment for colleges may not give more freedom.

June. 7. '68.

Student unrest is not just a portent.

次の医学教育，医局制度等の問題についての記事を若干紹介しておきます。

1. 三浦岱栄：「France 医学教育の改革」(日仏医学，12(1)，Feb. '68. p. 1-3)
2. 五島雄一郎：「医学教育に就ての私見」(医学のあゆみ，64(8)，Feb. '68. p. 439-440)
3. 「〈シンポジウム〉これからの医学教育と医療」(日本医師会雑誌，59(6)，Mar. '68. p. 747-770)
4. 「特集・医学教育をめぐって」(診療と保険 10(6)，June. '68. p. 803-822)
5. 水野　肇：「新しい医学教育制度，阪大方式」(自然，23(6)，June. '68. p. 17-22)
6. 水野　肇：「10年目を迎えた岡山方式」(自然，23(4)，'68. p. 17-24)
7. 牛場大蔵：「医学教育の二つの提案」(医学のあゆみ，65(7)，May. '68. p. 391-4)
8. 「特集・医学教育に関する諸問題」(医学と医療，2(2)，Dec. '68. p. 10-80)
9. 宮本　忍：「変革期の医学教育」(自然，24(3)，'69. p. 30-38)
10. 水野　肇：「揺れる西独の医学教育」(自然，24(5)，'69. p. 55-59)
11. Todd, A. R., A British view of medical education. (J. Med. Educ. Jan. '69. p. 23-30)
12. Habbard, W. N. Jr., A report from the September, 1968, AAMC Workshop on the Medical Curriculum. (J. Med. Educ. Jan. '69. p. 58-61)
13. Cohen of Birkenhead. Medical education in Great Britain and Ireland, 1858-1967. (Brit. J. Med. Educ. Jan. '68. p. 87-97)
14. Charvat, J. et al., A review of the nature and uses of examinations in Medical education. (WHO Public Health Papers, '68. p. 1-74)
15. 「特集・医局問題の周辺」(九大医報，38(2)，June '68. p. 10-29)
16. 水野拝太郎：「医局制度の解体始末記―生まれくるものへの期待〔阪大整形外科〕」(自然，24(4)，'69. p. 106-111)
17. 「特集・研修医制度をめぐる医学部紛争」(診療と保険，10(5)，May '68. p. 638-675)
18. 「特集・病院と医師の修練」(病院，27(6)，June '68. p. 19-67)
19. 白木博次：「東京大学医学部将来計画」(医学と医療，1(2)，'68. p. 161-170)

以上大学問題に関しての最近の記事をご紹介しましたが，最近出た書誌で，次のようなものをご覧になれば，なお，参考になるものと思います。

単行本

- 大学・大学生，大学論，学生運動関係の本，(出版ニュース，1969年2月中旬号)
- 大学・学生問題関係図書文献（厚生補導，25号，'68. 6)
- 学生問題に関するおもな書物（毎日新聞，44. 3. 26)

雑誌記事

- 大学・学生問題関係雑誌記事一覧（厚生補導，25号，'68. 6)

文献シリーズ No. 1，No. 2 の予告

No. 1　EEC（ヨーロッパ経済共同体）に関する文献目録，44. 5. 30

No. 2　外国企業の日本進出に関する文献目録44. 7. 1 発行予定

この文献シリーズ御希望の方は研究・教育情報センター準備事務室にお申し込み下さい。

八　角　塔　／第 5 号／昭和44年7月1日発行／編集発行人　石川博道／
発行所　慶応義塾図書館／東京都港区三田2-15-45／電 話（453）2111（大代表）